

## 高等学校医学部薬学科の修学旅行 (明治 31 年)

薬学雑誌 1898 年度 629 頁など

修学旅行という語は当時もあった。明治維新から 30 年、彼らは旧制中学を卒業し、各学区に 1 つずつ、5 校あった官立薬学校に進んだ。旅行はほとんど徒歩である。当時は有機化学も製薬会社も未発達で、薬は昔ながらの草木や鉱物だったし、無機分析術(衛生, 裁判化学)がハイカラ、花形の学問だった。だから目的地の多くが温泉場だったのには、ちゃんとした理由がある。

一高(千葉)は 5 月 8 日出発で 5 日間。医学科 1, 2 年は日光, 3 年箱根に対して、薬学科は房総半島。「風景絶佳にして異卉珍草は山野に充ち、加ふるにヨウド製造所, 峰岡銅鉱山あり。修学旅行には最高の地方にして…」(629 頁)。仙台の二高では、5 日間で塩浜肝油製造所, 沃度カリ製造所, 石

灰製造所, 薄荷培養所その他温泉場(516 頁)。

岡山の高三は記事がない。1894 年にわずか 4 年で廃止されたからだ。京都の三高工学部設置のため、あるいは医学科拡充のための経費を作るためだったというが…。金沢の四高は、1 年生が 1 泊にて江沼郡馬場山付近へ植物採集(536 頁)。3 年生は 5 月 26 日より 3 泊で鉱泉分析実地試験のため、加賀国能美郡山中村温泉場へ(638 頁)。

長崎の五高医学部は 2 月 23 日から 11 日間熊本、鹿児島へ(301 頁)。「特に薬学科第 3 年級および第 2 年級の十数名の学生は別に薬学隊を組織し、植物採集用具あるいは鉱泉試験用器械および薬品を銃に代えて携帯し、途中…薬学上に関係あることは悉く研究材料となせり」。鉄道のない時代、三角に上陸、日奈久、佐敷、水俣(以上肥後)、大口、横川、加治木(以上大隈)を経て鹿児島市では島津公の鉱石分析所など見学した。夢のような直行汽船で帰校した後、採取植物を整理したが、寒冷期で花がなかったことで判別が難しく、また、コケなど隠花植物の幾つかは同定できなかったとある。

小林 力